

# 虚構とリアリティの問題

——「馬子にも衣裳」の一考察——

中野和朗

文学の素材、あるいは対象は、人間及び社会、そして人間との関わりにおいての自然、世界である。それらの真実を、ことばによって芸術的に形象化すること、これが文学の創造的作業だと言うことができよう。つまり、文学の目標は、——芸術に「目標」などという概念をもちこむと、激しい嫌悪感を隠そうとしない人たちもいるだろうが——つねに、芸術の方法による真実性の獲得に、真実性への飽くなきアプローチにあると言うことである。

文学におけるリアリズムの問題も、まさにこの視点においてますます重要性をもつのである。

他方では、文学は本来的に、ことばの広い意味において、すべてフィクションであるといえることができる。ある作家は、このことを次のように述べている。「小説はそれが現実に入った事件に基づいたものであれ、純然たる作者の想像力の産物であれ、現実にある事物を描写し、人物の行動を模写している。そこで使用される言語は日常的な指示的機能を果しているが、しかし完全な描写も模写もあり得ない。その全体において結局作り話であり、神話である。」<sup>(4)</sup>と。

現実の中のある事実を、よしんばくソリアリズムの手法によって写しとったとしても、事実そのものを写しとることさえ叶わぬことである。写しとられたはずの事実は、作家という媒介者をいったん経由することによって、本来の事実とは全く別個のものになってしまうのである。文学が本来的にフィクションであると言い得る根拠もここにあるのであるが、このことは実は、文学が、現実における事実以上に真実性を獲得できるカギでもある。

例えば、ある同一の事物を十人の人間が、ことばによって描写するとしよう。そこに表現された事物は、全く十人十色の形象を与えられることになるだろう。その場合、表出された多様な形象を全て合わせても、現実の事物を全一のものとして現出し得ているかどうか、はなはだ疑問であるし、また一方では、たった一つの描写が、現実の対象をはるかに凌駕して、真実性を獲得しえているということもあり得るであろう。このこと、つまり、描写の多様性とか、表現における真実性の獲得の強弱は、いったい何によって生ずるのであるだろうか。表現主体の芸術的表現能力が重要な要素であることは、容易に察せられるところである。しかし、これが全てではない。むしろ、より本質的な、従ってより重要な要因がある。それは、事物の表現の前提には、事物の認識ということが不可欠のプロセスとなっている、ということである。だからこの事物の認識の違いこそ、表現の多様性、描写における真実性の強弱を決定するより本質的な要素なのだと言うことができる。

「リアリズム」をリアリズムたらしめるものは、まさに正しい認識、即ち、科学的世界認識、つまり、弁証法的唯物論の世界認識だと言ってよからう。

このことに関連して、ある作家は、次の様に述べている。「すなわち小説家は自由な想像力を駆使し、または現実における事件を模倣して作品を構成するけれども、その構想においては、その社会的身分、或いは彼の意識的にか無意識的にか、感染している階層のイデオロギーに従って話を作る、ということである。」<sup>(2)</sup> そのイデオロギーにもとづいて、認識したものを、時としては認識行為そのものとして、現実を、(その真実を) いかにか真実なものとして表現するか、それは、個々の作家の芸術的才能の問題であるが、文学は、すでに述べたとおり、本来的に言葉の広い意味においてフィクションなのであって、認識されたものを表出する段階で、つまり手法の問題としてフィクションの要素が拡大されるのである。

フィクションとリアリティの問題を、具体的に、ひとつの文学作品を、この視点から考察してみることにしよう。

## 二

ゴットフリート・ケラーは、ドイツ文学では貴重なすぐれた批判的リアリストとしての評価を不動のものとしている。とりわけ、短編集「ゼルトヴィラの人びと」の諸編には、リアリスト、ケラーの面目が躍如としている。

その第一部の最後に置かれている「小猫シュビーゲル」は、メールヒェンとわざわざ断り書きがされている一編で、メールヒェンの形をとりながら、実に見事に「典型的性格」を再現し得ている作品である。<sup>(3)</sup> 一方、第二部の巻頭に置かれている「馬子にも衣裳」は、手法とリアリティという関連の点でいえば、シュビーゲルとは丁度写真のポジとネガの関係にある作品ということもできるのではなからうか。

「馬子にも衣裳」の主人公、ヴェンツェル・シュトラピンスキは、しがない仕立屋の職人にすぎないが、ふとした運命のいたずらが、彼をポーランドの伯爵に仕立て上げ、そこから産み出される悲喜劇が、この短編の筋立てとなっている。

この運命のいたずらは、どのようにして起こるべきして起きたか、導入部の関心はもっぱらこのことの理由づけに注がれている。シュトラピンスキの特徴は次の様に描かれている。「一張羅の黒い礼服の上に、ゆったりした鼠色のマントをはおっていて、それには黒ビロードの折返しがついており、着ている人を何か高尚でロマンチックな風采に見せていた。(中略) そのうえ、長い黒い髪と口髭とは念入りに手入れが届いていて、顔立ちは蒼白く、整っていた。(中略) 彼は円形のマントや、それと同じく上品にかぶることを心得ていたポーランド風の皮帽子からわかれるぐらいなら、むしろ飢え死にしたほうがましだと思っていた。(中略) そのうえ彼は口下手なほうだったので、出かかった言葉も言わずじまいになり、結局マントの殉教者となり、ひもじい思いをして、このマントの黒い裏地のように陰気になるばかりだった。」(294)

シュトラピンスキのような人物は、例えば、ジョン・カビス(「幸運の鍛冶屋」)をはじめ、ケラーがしばしば登場させている、彼が得意とするひとつのタイプである。彼は、どこから眺めても気の弱い善良な庶民であり、社会的ドラマの中では、いつでもその他大勢の中の一人であるに過ぎない。仕立職人であるという以外これといった取柄のない人間である。

ただ、一見したところではとても仕立職人とは見えない容姿と、身づくろい、この点が変わっているといえは変っている点である。「長い黒い髪と口髭」は「念入りに手入れが届いて」（傍点は筆者）（293）いる。さらに着ているものがふるっている！「黒い礼服」、その上にはおっているのが、「黒ビロードの折返しのついている鼠色のマント」（293）である。見落してはならないのは、それらが「着ている人を何か高尚でロマンチックな風采に見せてい」（傍点は筆者）（293）ることである。

しかも、この仕立屋は、つとめていた「ゼルトヴィラのある仕立屋の親方が破産したために」「仕事も賃金も失って、旅に出る」（293）破目になり、ポケットには指ぬきがはいっているだけで小銭さえもないという状況である。われらが主人公、ひもじくて疲れた旅の仕立職人の、たったひとつの特性は、まさに「着ている人を何か高尚でロマンチックな風采に見せ」ているその衣裳である。この服装に関しては、さらにわざわざ次のように書き足されている。「このような服装は、別段悪事や詐欺をたくらむつもりはなかったけれども、彼にとってはやめられぬものになっていた」（293）と。

この容姿と服装のために、仕立屋は、たまたま通りがかった、陸送中のある貴族の高級馬車に便乗して立ち寄ることになった旅館で、ポーランドのおしのびの貴族と思いをされるのである。

資本主義社会においては、商品の交換価値を高めるために、さまざまな手が使われる。外見を過大に飾ることによって、実際の中身以上に見せかけることは、この手のもっとも初歩的なものであろう。そしてこれはまた、資本主義社会における疎外態のひとつであり、その本質的な矛盾を示めず現象なのである。

「馬子にも衣裳」とは、まさにこの現象の本質を適確に表現した言葉ではなからうか。ケラーがすぐれたリアリストと評価し得るのは、このような現実の本質をすどく洞察しているからである。リアリストとしてのケラーの眼は、いたるところで光っているが、そもそも、仕立屋シュトラピンスキがポーランドのシュトラピンスキ伯爵にされていくなりゆきの描写などは、まさにこのような眼によってこそはじめて素晴らしい成功を収めることができているのである。

仕立屋が便乗できた立派な馬車は、ゼルトヴィラの富裕な隣町、ゴルダッハの町の一級旅館その名も「はかり屋」に横づけされる。これは、馭者が昼食をとり、馬を休息させるためであったが、迎いに駆け出てきた宿の主人と召使たちは、「この見たこともない立派な轂の中からどんな中身が出てくるだろうかと、好奇の眼を見はっていた。」（295）呆気にとられた仕立屋が例のマントにくるまって、蒼ざめたととのった顔で、憂鬱そうに伏目になって下り立った時、彼は、「神秘的な王子か、領主の御曹子のように」（295）人々の眼に映ったのである。無意識のうちに彼は、事態の成行に身をまかせているうちに、宿の食堂に丁重に案内され、下にもおかぬ扱いをうけることになる。特上の客の倒来と、宿中ではんやわんやの騒ぎとなる。「はかり屋」の主人、やり手の料理女、給仕、等の対応、振舞いはケラー一流のシニカルなユーモアをともなつてこまやかに描写されている。

「馬子にも衣裳」の生みだす誤解が、次から次へと連鎖的に生起し、波及しあって、仕立屋から幻しのシュトラピンスキ「伯爵」がつくり出され、事態はサスペンスをはらんで深刻な悲劇から一転しての大団円へと展開していく。さて、フィクションとリアリティの問題という本論のテーマとの関わりにおいて、「馬子にも衣裳」の効果が、仕立屋シュトラピ

スキィを消滅させ、「伯爵」シュトラピンスキィをひとり歩きさせるに至る経過が、わずらわしい作業ではあるが、本文に沿って逐次追及されねばならない。

### 三

物語りの発端は、なんと言ってもどこか高貴な印象を与える主人公のつけている衣装である。これが仕立屋の貴族への虚妄の变身への第一要素であり、第二は、「東部スイスの古城にいる外国の領主」(294)へ陸送中の、たまたま通りがかった立派な馬車の登場である。この馬車の外見の立派さが「馬子にも衣装」の効果をさらに倍加させたことになっている。更に、たまたま立寄ったのが一級旅館である。高貴な外見の馬車から降り立った高貴な外見の人物、これだけで、一級旅館の主人をはじめひとびとは、何の疑いもなく、彼をいわくづきの外国の貴族と思い込む。「はかり屋」の主人の次のせりふが全てを語っている。「(前略)お客の予約がなくて何の用意もないときに限って、こういう旦那が来られるんだからな。それにあの馭者はボタンに紋章をつけていたし、馬車はまるで、王様の馬車のようだった。あの若いお方は高貴のご身分だからめったと口もおききにならぬ。」(295)仕立屋は、ここですでに定められたルールの上に乗せられたことになる。彼は、「心の落ち着きを失っていたのか、あるいは〔馬車のまわりに集まった〕人の群れを突破してさっさと自分の道をゆくだけの勇気がなかったためか、彼はそうはしないで、うかうかと(傍点筆者)家の中へはいり」(295)こんでしまう。

自からたくらんでそうしたのではない仕立屋は、良心のとがめから、こっそり脱出しようとする。「とうとう彼は覚悟をきめて、マントをまとい、帽子をかばって、逃げみちをみつけようと外へ出た。しかし気が動転していたのと、家がただだつびろいたために、階段がすぐに見つからず、たえずうろろしていた。給仕はそれを見て、お客様は例のご用を感じていらっしゃると思い」(297)こんで、彼を「廊下のつき当りのきれいな字の書かれた美しいラック塗りの戸の前へ」(297)案内してしまふ。逃げ仕度としてマントを着て歩いていることは、「お客様は寒がっておいでだ。食堂をもっとあたためろ。(中略)薪を籠一杯ストーブにくべるんだ。」(297)「畜生!はかり屋じゃマントを着て食事していただくなんてことがあっていいものか。」(297)ということになってしまふ。びくびくしながらの食事も、「まあ、すばらしい。あの方はほんとの魚の食べ方をご存じだわ!やわらかな魚の肉を櫛を殺すみたいにナイフでごしごし切ったりしないわ。あのお客様はご大家のご主人だわ。」(298)と見られ、おずおずとぶどう酒を一口すすると、「こいつあ驚いた!あの方は通でいらっしゃる。わしの上等の酒を、まるでドウカーテン金貨を金のはかりにのせるように、舌にのせてすすりなされた。」(299)と感嘆される有様である。いまや舞台の真中にひきだされ、人びとの好奇の眼の注視を浴びることになった哀れな仕立屋は、うずらのパイが運ばれてくるや、「ここに盛られた小さな塔のようなパイはおそらく最後の料理だろう。あとは野となれ山となれ、こいつをがっちり食べてやろう。いったん腹にはいってしまえば、王様だってとり戻すことはできないのだ!」(299)と腹を決め、飢えを十分に満すためにやけそ気味にそれを平げてしまふ。すると、これがまた「あの方はうずらのパイをよくご存じだ。下賤のものなら焼肉の方にとつたことだろうね。」(300)と料理女に言わせ、また主人には「わしが修業中の旅行での見聞では、將軍やお大尽だけがあんな食べ方をしたもんだ。」(300)と

言わせることになる。

第三の条件は、シュトラピンスキイを拾った馭者の茶目っ気の溢れた悪戯である。というのは、旅館の従業員たちが、あの方は誰かときいたのに対して、「冗談好きでずるがしこい男」だった馭者は、「あのお方はな、シュトラピンスキイ伯爵とおっしゃる方だ。ひょっとすると四、五日ここにお泊りになるだろう。馬車といっしょに一足先へ行くようにお命じになったからな。」(300)と答える。仕立屋のことを識らぬのに馭者がどうしてこんな出まかせの話しをしたかは、次のように説明が加えられている。「馭者がこんな悪ふざけをしたのは、仕立屋にしっぺがえしをしてやろうと思ったからである。あいつはおれが親切にやったのに、お礼の言葉もわかれの挨拶もしないで、さっさと宿屋には行って旦那面をしていやがると彼は思ったのだ。とことんまでいたずらしてやれと思って、馭者は自分の飲食代も馬のかいば代もたずねずに馬車に乗ると、むちをふって町から出ていった。(中略)この仕立屋は、もともとシレシャの生れで、ほんとにシュトラピンスキイという名だった。ヴェンツェル・シュトラピンスキイ。これは偶然だったのか、あるいは仕立屋が職人手帳を馬車の中でひっぱり出して、そこへ置き忘れたのを馭者が失敬したのか——」(301)この馭者の言葉は、まわりの者たちに、仕立屋を伯爵と思わせる決定的な証言となった。宿屋の主人などは、とび切りの上客とばかり「喜色満面でもみ手をしながら」(301)シュトラピンスキイの前へすすみ出て、食後にとっておきの酒を持ち出す超サービス振り。そうこうするうちに町の名士の常連たちが「はかり屋」に集ってきて、われらが「伯爵」を囲んだ。「笑うべき単純な人々であるどころか、むしろ機転のきく商人で、愚鈍というより狡猾な人々であった」(310)彼らは、たちまちこの外国の「貴族」を仲間ひっぱりこむ。折しも天気は上々となり、揃って田舎の知事の邸まで馬車で繰り出すことになる。思わぬことからとんでもない立場に追い込まれた仕立屋は、脱出の好期到来と招待に応じ、馬車に乗りこむ。

ここで人々の誤解をさらに深める第四の事情が、次のように説明されている。

「さて、仕立屋は若い見習いのころから田舎の地主にときどき注文をとったことがあり、兵役では騎兵隊に勤務したので、馬を扱うことにかけては十分な心得があった。それで同乗の男が、丁寧に、馭者台にお坐りになりませんかと訊ねたとき、彼は即座に手綱と鞭を握って、お手本どおりの姿勢で、連歩で馬を走らせ、町の門をぬけて、国道へと馬車を駆った。そこで紳士たちは互いに顔を見合せて、ささやいた。『間違いない。あれはともかく貴族だ。』——」(303)

知事の邸で一行は、大歓迎をうけ、もてなされ、「この地方では男が集まると賭けカルタをやらずにはすまされなかった」その賭けカルタが始められる。

ここで更に第五の事情がつけ加えられる。「シュトラピンスキイはいろいろな理由で参加を断ったが、それなら是非見物してほしいといわれた。(中略)伯爵を二つのグループのまんなかに坐らせて、彼らは一心に、才智と熟練を発揮して、同時に伯爵をたのしませようと心がけた。そこでちょうど廷臣たちがたのしい芝居を演じて世間のありさまをお見せするのを眺めている病身の王様のように、彼はじっと坐っていた。(中略)いちばん適当な話題は馬や狩りやそういったことがらのように思われた。シュトラピンスキイもこの点では、ひけをとらなかった。彼は、昔将校たちや地主のそばで聞き覚え、その当時すでに大へん気に入っていた専門用語をただとり出してみせさえすればよかった。こういった用語をぼつりぼつりといくらか控え目にたえず憂鬱な微笑を浮かべて口に出すごとに、それによっていっそ

う大きな効果を得た。ときたま二、三人が立ち上がって脇のほうへ行ったら、彼らは、『全く非のうちどころのない貴族だ』と言った。」(304)

カルタが終り、新しいぶどう酒の吟味も終わったところで今度はトランプによる賭けが始められシュトラピンスキも嫌応なしにひっぱりこまれてしまう。途方にくれるか、なんと！「次の瞬間、仕立屋は勝って、賭金は全部彼のほうへ押しやられた。」(305)のである。「結局、みんながカルタに飽きたとき、数枚のルイドール金貨が手もとに残ったが、それは生涯でいまだかつて持ったことのない金額だった。みなが自分の分をポケットへ入れるのを見て、彼も同じようにポケットにしまったが、すべては夢ではあるまいかという空恐ろしい気持がしないではなかった。」(305)

物語りはまことに調子よく、とんとん拍子に展開させられる。そして、夕食前の一とき、みな散歩に出たとき、彼は脱出を決意し、それを試みるのである。

「そこで彼は、例の丸いマントをひらりとまとして、皮帽子を眼深にかぶり、一列に並んがアカシャの木の下を、夕陽を浴びてゆきつ戻りつし、美しい景色を眺めているふうだったが、実はどこかにうまい逃げ道がないかとさぐっていた。(中略)しだいに彼は、家から遠ざかり、裏に小道が通っている繁みの中においてはいった。」(306)これでまんまと脱出成功か、と思って読み進むとなんと！これまたまことにタイミングよく「が、その時角を曲がって突然に知事さんが娘のネットヘンを連れて彼のほうへ歩いて来た。」(306)のである。かくして、シュトラピンスキとネットヘンの運命の出会いが現出するのである。

この場面は、この作品の筋立ての上で大きなヤマ場で、ここまでがいわば導入部、内至は前半部と言うことかできるが、さらに重要なことは、美しく優しい娘との出会いにより、主人公の現在置かれている状況に対する気持にも微妙な、しかし決定的ともいえる変化が生まれたことである。つまり、この出会いにより受動的状況対応が能動的対応へと変化する。

知事は自分の娘をポーランドの若き伯爵に紹介し、夕食へ誘う。このくだりはこう描かれている。「旅人はすぐに帽子を脱いで、まっかになって、恭々しい、いや臆病そうなおじぎをした。なぜなら舞台は一転して、一人の令嬢が登場したからである。しかし彼の内気さとあまりにも礼儀正しい態度は令嬢に悪い印象は与えなかった。それどころかこのような身分の高い、面白い若い貴族の臆病さや謙遜さや礼儀正しさは彼女にとってほんとに感動的で魅力的に思えた。身分が高いほど頭は低くなり、純粹になるものだという言葉が彼女の頭にひらめいた。(中略)彼女は、自分も愛らしく顔を赧らめて、丁寧に騎士に挨拶をした。そして人にむかって自分をよく見せたいと思う気軽な町むすめのように、さっそく、早口にさまざまなことを彼に話しはじめた。一方、彼はこれまで、押しつけられた役に少しでもはまるように何も努力しなかったのだが、今や思わず知らず少々気取った話しぶりをして、いろいろなポーランド語の単語を話に混ぜた。要するに、仕立屋の血は令嬢の前に出たために奔馬のように躍り出して騎手もろとも突っ走りはじめたのである。」(傍点筆者)(307)これから判るようにこの時点から、仕立屋は、自分に周囲の人から押しつけられた偽「伯爵」の役まわりを積極的に演ずるようになる。夕食の席では、この二人は隣合わせに坐らせられ事態は一層抜きさしならぬことになって行く。とくに傑作は、飲むほどにますます興が湧いてきた面々は、流行の歌など歌いはじめ、「伯爵」にもおおくの歌をと所望する。

するとどうだ！彼のそれに対応する堂にいった振舞いは！それをケラーは、次のように描いている。

「彼は、酒のいきおいで臆病さにうちかった。昔彼は何週間かポーランド人の店で働いたことがあって、いくつかのポーランド語とそのうえ民謡を暗記していた。意味は考えたことがなかったが、おうむのようにひびきだけはそらんじていた。そこで彼は上品な態度で、ひそかな悲しみにふるえるような声で、声高くというよりもためらいがちに、ポーランド語でうたった。

一万匹の豚の子が

デスナ川からヴィスラまで

押し合いへし合い尿をする

くるぶしまでも泥にして

あばずれものカチンカは

とぼとぼのろのろ歩いてる

一万匹の牛の子が

ポリニヤのあおい原っぱで

もうもうもうと鳴いている

カチンカ、おいらのカチンカよ、

信じておくれカチンカよ

おいらはおまえに首ったけ

『ブラボオー、ブラボオー!』と紳士たちは手をうって喝采した。ネットヘンは感動して『ああ、民族固有のものはいつも美しいものですわね』と言った。幸いなことに誰もこの歌を翻訳してくれとは言わなかった。」(308)

なんと愉快的な描写ではないか!このような描写に代表されるケラーのユーモアは、総じて笑いの乏しいドイツ文学の中にあって、まことに異色で貴重なものと言わねばならない。これはケラー文学の特筆すべき特性のひとつである。

#### 四

ネットヘンの登場によって、シュトラピンスキの姿勢は、根本的に変化をきたした。即ち、自分の意志とは無関係に創り出された状況への受動的な順応から、積極的な対応へとである。

ゴルダッハの町での「伯爵」に変身しての最初の朝、主人公にはまだ若干の俊巡が残っていた。朝の散歩の途中城門の前にも出た。すると行手には広びると原野がひろがり、そのまま旅を続けることも決して難しいことではなかった。

「そこで彼は、岐路に立った若者のように、ほんとの十字路に立った。町をとりまいている菩提樹の林からは客を招くような煙が立ちのぼり、金色の塔の擬宝珠は木の梢から誘惑的に輝き、幸福、享楽と罪、ふしぎな運命が合図をおくっているようだった。煙のあるほうにはしかし広びろとした遠景が輝いていた。労働、欠乏、暗闇がそこに待っていた。しかしそこには、公明正大な心と落ち着いた生活があった。」(312)そこで、彼はそのまま町から遠ざかるようと一步を踏み出そうとした。すると、またもや時期を逸せず、絶妙のタイミングで知事の令嬢が「赤いヴェールを風になびかせてただ一人美しい馬車を駆して」通りかかっ

たのである。するとシュトラピンスキは、くるりときびすを返すと町へと戻るのである。かくして「今や彼は、生氣を取り戻した。日ごとに彼は、さし昇る太陽の目に見えて色濃くなってゆく虹のように変化していった。(中略)それにもかかわらずシュトラピンスキはこれまで名もない一職人として暮らしていたところに一度も知らなかったことを経験した。毎夜毎夜眠れぬ夜が続いたのである。そして彼から眠りを奪ったものは、良心の咎めよりも、貧しい仕立屋である正体が暴露されやしないかという、恥辱への恐怖であった」(314) 彼は金を工面するため「富くじ屋やその代理店のあるほうぼうの都会から、いずれにせよあまり多くない賭金でくじをとりよせたが、そのための手紙のやりとりがまたしても意味深長な関係のしるしだと受けとられた。これまでも一度ならず、数グルデンを儲けて、それをすぐにまた新しいくじを買うために使った。(中略)彼は、今では幸運がころげこんでくるのを当り前のことのように思っ〔ていた。〕」(314)

このようにしてシュトラピンスキは、思っても見なかった倅せな生活を手に入れたが、心は常に落ち着かなかった。「もちろん出来ることなら仕立屋の親方としてゴルダッハにとどまり、もし資力があれば、ここで一軒の店を構えてゆきたかったのだが、ここでは彼は伯爵としてしか生きられないことは明らかだった。」(315) そこで考えついた妙案は、短期の商用旅行という口実でゴルダッハの町の人々に別れを告げることであった。ところがこの頃にはすでに町ではネットヘンとの間がさまざまに取沙汰されていて、あるうことか彼女がときとして伯爵夫人とよばれることさえある事態となっていた。だから招待をうけたある舞踏会で、「止むを得ず旅に出る旨を伝」えるや、これがまた一挙にもやもやに洪着をつける強烈な触媒の作用を果たし、シュトラピンスキ「伯爵」と知事令嬢の婚約がたちまち想整うこととなる。

さて、物語りはこの先ますますつくり話しの様相を色濃くしながら複雑な葛藤劇を展開している。

婚約披露を兼ねた仮装舞踏会の席場で、彼がかつて働いていたゼルトヴィラの仕立職の親方によって、彼の正体がついに暴露される。彼はいったんは全く絶望的な破局に追い込まれるのであるが、彼の生いたちから始まって事の成りゆきの一部終始の告白を聞いたネットヘンの賢明な決断によって、二人は危機を切り抜け結婚へとゴールインすることになる。

「ネットヘンはヴェンツェルにむかって、あなたはかならずゼルトヴィラで立派なお店を構えた洋服屋兼呉服商になるのよと言った。ネットヘンの言ったとおりのことが事実となった。(中略)彼は控え目で、儉約で、商売熱心だったが、だんだん大きく手を広げていった。(中略)年一年と商売上手になり熟練し、(中略)相場にも成功して、(中略)十二、三年後には、妻のネットヘンが産んだ大勢の子供たちといっしょに一家そろってゴルダッハに引っ越し、そこで名望家となった。」(340)

こうしてこの傑作の物語は、めでたしめでたしで終わっている。

## 五

以上詳細に読んできたとおり、この物語りには、魔法使いや魔女は登場せず、夢や星や月、つまり夢幻の世界が展開されているわけではない。資本主義勃興期の市民社会が舞台なのであり、ごくありふれた庶民群像が登場させられている。ケラーの秀れたリアリストの眼は、

これらの人物像を實に見事に活写し得ている。しかし筋の展開をたどって明らかなように、この小説は練りに練られた技巧的な作為に塗り固められている観があり、ケラーは、フィクションの達人として従横無尽に筆をふるっている。

それにもかかわらず、扱われているテーマは、近代資本主義社会の本質的な疎外態だと示摘することができるし、近代社会の典型的な市民生活とその風俗が見事に描かれていると言うことができる。

「馬子にも衣裳」は、その筋立てにおいてきわどいまでのつじつま合せがなされながら、現実主義的唯物論者であるリアリスト、ケラーの現実認識によってリアリティはいささかも減じてはいない。

文学創作における虚構性と真実性の問題は、確かな現実認識が前提されている限り、豊かなフィクションによって、リアリティはますます確固たるものとなり得ると言うことができるのではなからうか。

### 註

テキストとして用いたのは、Gottfried Keller Sämtliche Werke in 8 Bänden VI. Aufbau-Verlag Berlin 1958 である。

本文からの引用のあとの数字はこのテキストのページ数である。なお、訳文については、世界文学大系79巻「メーリケ・ケラー」所収の堀内明訳を参考にさせていただいた。

- (1) 大岡昇平「文学表現の特質」岩波講座文学I, 岩波書店, 1975年, 164ページ
- (2) 同上, 165ページ
- (3) 拙稿「文学の方法とリアリズムの問題」『人文学報』第13号, 1979年参照